国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

高尾船字文

曲亭馬琴翁編

歌川國貞画圖

初編下冊

天保六乙未春

蔦屋重三郎
紫屋文七　合板

高尾船字文　第二冊

一曲の琴柱一雁乃玉章を通ハせ

附まハ教頭林冲妻　其英雄ハ六尺乃漢

足ハ市井の女乃方

女子助過ぐ　白　席の間ニ入る

附まハ禁軍豹子頭

足ハ井筒女子助

其高休ハ執掩職

中正文庫

明治 43.9.3 購求

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

高尾船字文巻二冊

曲亭馬琴著

一曲乃琴拉よ屠の琴と通いも

物そきそ〜とられくまゆくも二月はなりしが雷鳴ゆへ
後の関戸そきその谷義ほとれと若鶯舎きて七のぼり書る。
谷義人今ゆとびむ河ゆく。宿今千あとり半〜雷ふおとりうと震
利ゆとり今の宮まで地ゆとせる紅葉く雨の弱よいとりゆれば
雷一わの酒屋さ辛より。利ゆよ酒とゆるまひ又谷義が方へ
一通の礼状ときてめ。れを利ゆよ後〜名れが利ゆよ後を
うきとり酒茗へゆんとせ〜にぞぜん表にゆるまれる酒の

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

酔大ぶのあり。只和ろくと豆の路どころも定めぬ乃のうちよ
倒まこく折あり。家工谷鄙ぐ夏法あく穀物とつはそ寄
馬圍山八のあり。ひ河男のあつさ麦多ぶ乃也
氏利ぶ酔くれく居くり。山八海麦場の伊氏利祭
カく倒まこく居ると見こ。ろうそ川紀さんとせくちづふ
利祭ぶふとろよりく要のる低地ちう。山八要兎也文字い
ろく仁居ぐまぐも。谷鄙ぐ居こ麦の字せまき居ぐ山八
大ぶまるび。我ぐしろ八工面あくく小寄酒ものむとゑび拙こ見
合の寄ぐ祭あつきうぐ雷異別ぐ安くう曲このそ。

今に成て人相書をもつて詮議する時
は紙とりて
貸座敷遊人。儀義の合をせしめんと。
貸座敷いそがもく板利益をうく酒の時あく。かの紙を
さぐるふ。これ三ぴつぐせんと案ぐ
ちといつぐ。ぬらまもせん。兵ゴ一の紙とのべく。紙のうせべ
いつぐるにちくいろーと。案きちかい。郡ごくふえうう。雷母やま
ぐ。ゴのれとのべ。紙のるいをちらぬ郡をそ郡ちうる。その
郡すぐに郡そんる。ゴの郡本戸高遠。馬方山八と
先ま。そく。大勝れ捕人を引連谷郡門の戸と郡ぐ

郡ぐ郡ぐれば谷郡の注意あり郡ぐ郡ぐ。これとのべを
郡ぐ郡ぐ郡ぐれぐちくかる一ぐんて。谷郡郡ちちる郡と
郡ぐ。ゴの紙とのべ。ぬらまもそべ大戸高遠馬母の注意
ちるの雷者ちちかく。ゴひ郡くすの郡人をそくちちくう。
ちちいちわどのちぐ。郡ちこ。郡ちこの紙あちうべ。ぐんぐ郡ちと郡ぐ
ぐ郡ぐ。郡ちこ。郡ちこ。郡ちこ

谷蔵さも仁掴めさせ。こまると捕人の大世のとろくとはあまる。
谷部雅楽のろ助のたれば侍ふ合今天輝はとまむ安とろて
せ雅ろまべさもどがの大勢ろ庫ろくもむくだろとろ迷ちろろ。ひ様
仁谷義入ろ寝利ゆとふ。例ーゆのきみつくひ奴大切のろ浪
と蔵ーかくふ本事と引出をこのあ兎りの。今打ところも奴ろれ
ぶもろ扇ろうつとあろるなりまぶひ人今ぶだろうい助るぶと。天輝
掴とろ出ー脊骨も打ふぶちのや。行ーの草ー今城常
と首ふを三郎人とるその所。ーふ久を捕人の大ぜん
谷義とるるエて。ぶふろ兎れのんまいーゆそ○九馬ろ人杉兎公乃

は蔵ゆ兎の方ともせーい綱ー猪元ゆ身安て。二八のろも
二ゆ三ゆその新ー西部ー耻その兎部の人掴も及ぶ様ゆ家浪の
乃ゆろーそ兎海ぶく伝人。ぶの乃ゆ年ぶ様ゆ今と流
ろぶと兎ゆそ渡ひ新ゆ兎ゆ弁ゆ乃ゆ。警ゆ人養ゆも
乃ゆ虎ゆ兎の新紙を伝ぶ。ゆ人一畳の内雅雅ろ乃ゆ様ゆ乃ゆ
西。指の兎ゆ乃ゆとろひ兎の衣ゆとろ人ゆれゆ乃ゆ兎ゆ日の
乃ゆ人と兎人。ゆ兎ゆ幕ゆ乃ゆ。ゆ乃ゆ兎ゆ乃ゆ。ゆ乃ゆ。
柳ゆ人の年ゆ新ゆひて俳の席ゆ人ゆ兎ゆ人ゆ萩の方ゆ人ゆひろゆ。
ぶゆ乃ゆ人ゆ俳ゆ。兎ゆ乃ゆ。ゆ乃ゆ兎ゆ乃ゆ色ゆ乃ゆ兎

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

くれくも。ひ鼎の琴は鄭。みそ丁りとを泳つらねのと。仕さ三るく
稚毋の琴ぶよんぶくく。琴の道とかぶる。奥家花伝まあ茂るや
ろろ拍者ろとちていいこぶ。ーも。簡法。ろ。くれ乱ぢ乱に乱
ぶまろのおろぐさ。ろろろと氣と久て。ぴあさ五の琴の一曲の琴弦が
を結とくちて。ろ尼をきとろは峯明。琴弁ろちけくと。ぢが好むたへうく。
琴の唱弁も又一奥と重ち弁の曲西くぢの琴好むろ中て琴の方琴
のまぶ。すろ尼。指の琴は藤ひり。源弁の蓋と藤す。ぬ五の書
いろ。ぬ指ろ。わろう。ろと吹ろ。琴。鄭風。六伯のひと藤るとちぶめ
ぬわくの琴弁ろろぐ。琴の方とかとひまろ世。眼とぶるその形ろう。

めぐ。ぬ琴ぬ琴ぬ。ぬ。六人おまりの白珠ぬ弁より琴さぐう。
琴の琴仕肩ぬ藤ろ。ぬ風ぬ行ぬくぢぐまりぬ。人。稀ろの琴ひと
ろ。この白珠とろうあぎ。ろ十まび十八とのふ二字とぬろ。藤る
琴とろて。琴とのくくヤろろ。天帝れ基。ぬの琴節をあわれ。是初
万。試易の吉陽とろ。めろの藤ぬ試猶の琴ぬ人の。六ぬ則むろ
めろむろの琴ぬろぐう。十八のとろぐ。千と世第ぬ天のろろ世。
ろぐひ。ーとれば琴とちぶめ。ぬろ琴。ぬ琴ぬ。ぬ。ぬ賢琴藤るが
琴ぬ。ぬ。ぬ。琴ぬ。琴ぬ。琴

ゆりのひろる。扨も典孫寛つらかある日仁木孫三郎を
故婚遺言の乃ゑ撰ひ、それと孫次郎を呼寄て二に似合
ぬ仲なりの。そこ[illegible]者共の方安心と内外のこと一点の過りなられば。
うたべき孫次郎と。因りそてさるきーきゆ振られば。仁木孫三郎
濃ゆも女さらーくて半喜りをこうをを。義の方に便安おそてる
豆腐を乗いの孫とりつ。れるは嫁の井と門別義の方に奈義の
義をつけ。ちいの義の方とおりあ。れ義三郎さびき記とう孫の
はれく仁木孫三郎。故なるめるきんとを思ーが豊にあり。ぶ義とく
ゆりをづきーも義の方の伯父舎弟の井に孫とやふくめ

義ーうへ。まをうびくーと孫旅執いてまびく。その義ーこ[illegible]とく
耳は。鬼ゆをとおて。ゆるこび。義ゆ。ゆく。過行が智。性賈が機
も。ゆ。記ゆ孫義及び。一切も毒ゆ。ひめと。ゆれば。二木孫の密
ゆるとの。ーとも。孫ゆて耳。ゆ。ゆび。ゆ。ゆ。ゆ

ゑーのべ。雑賀よりごろ。ゐ。ゐ。と。ゑ。ゑ。ゑ

附人とる間に、要別に来る新蓮の
の道をや来る。素姫しぎの和尚
とやひぶ国とよろしきのみるや。我くが眼まで及ばぬ女めの
間ごとを探ひて。熊く持参いてうと。二枚の経典とり
出。女めよ人世られば。女めは是と入るにその名誉とも定め
がごられぞも。その第法はいん方る。女めれと入こ。ぶ迎来の
人の法ぶんがいまごかる能ごとまど我を実きまべ。價は行ど
ありぞやたなやれとなこ。そしてよりきのみぶ。大今まもも服
ぶられども。乃ごは用の第法ぶ。ごきよるとめ。称仏とたられて

十あまぶ要ヤべ。女めはその人間強めて。素の乃をとのこ
乃ぶ西人。以附ぶの来るべき節のや。あこうよひ経典を実ぶと
ぶひぞの方がヤ十あとあまり言る生ぶ。あかまひるべるとれて
生ぶ今を涙出べ。乃ごや乃を搖くヤ乃人。百あとるるめる
ぶられども。素ぶ今ま人用のこと。七あまでたまけべとられば。
女めの経典と七あは買とう。天よまるこびは節び。ひ妙蓮ぶう
ぶ極とられて。求ぶ実ぶるさんのと。即ぶまぶ経典を打泳参ぶ年ぶおる乃る
女めはのやまるく白虎の間よ入る
その聖音女めの方人要役の結来るく云ぶる。乃沖の井どの

きるく女こゝゝのまめづらしき短冊を取持いきられしゝ。其の方の
聞くにつけて況あり。元のこゝ思いそだ短冊を持ちいきられ給
のるまでまぐるべと思られべ。女こゝゝ不審られば。我短冊と
異なりしきの其とあるよ伺のうちて萩の方れ思ふのうち
しゝゝとやとうるびあるらか。かの短冊とぬとろうて役たふ
思れのるにいろう。沖の井にくくと安寧しゝゝうられべ。沖の井を
出さ。萩の方に吳今厨れの吳に思れ度あれば若しゝふべいぞ
とうること安寧して。奥ふく法れぬき。きべらくは西に行ぬくとそ
出りが。きべらくみくく又沖の井を出。今日れくるこまれよれ思ふよ

ふらせられうるのあれべ。ゝゝかべ。女こゝゝを思ふ
はの思。イザこゝゝと先よろうとなと奥の方へ使ひしゝが。きべらくは西
と伺ふ。ゝゝまを見へあるべとうくく。沖の井から我の方へ
出べう。只今ご本ゝゝ取ゝ魚の五郎を出乗ゝてやうへ。孫ゝくへ
我思れべ思れ眠ゝゝるべとゝ教魚思れと呼ゝめ。海へ狂乱
せゝ。ゝの方へこれ西の桃檀何罷のうくいと安寧ぞ乃ゝ
ゝとのうち思べ。仁本ちゝくくと渡とるべ。若の思仁ゝゝよ
ゝれ。魚ゝが寸忠どゝ上ゝと掛べれべ。却て行ゝのそゝやゝう。
又これと云べう時。国家の大ゝとゝのんいまもとゝ。いゝあもつゝ思

脚の猫ぐひい蓋とかくごの金ハさそそめ。たまつが仏の門に陽春
下されたるとぶひこんぐるとの親を新を思ふまんされあんぐ。その方
国家の一大のわぐべ。ちやくくとり扱べき身を以くしとつこ。
いとあと仕まよ。余と拝んとその細わんと同のへべ。仁求猫戒
うつく大事つさかくにに宿とかるる上六。今れ伝のとつこやさん
と。迎智は人と差さけ。迎くよろく明るい。系国家式大の
とりの。よの義にわぐわさはゆ。抜の方。いろる天魔の足
人のやぐ。ひろ井間女ろ女と国家式。そそよに実ふ見れ
家乗にはろうのやと女井のとりさ。男女のきこへまーまに

に差ふまつこく後者の考後ろんとんとつけて何へ不よ
人のやぐ。ひーも遠ぐ。日くあ考ひとりゆ。まと涙ど。
法を賊。法ちぐろうぬさこ夜。ゆもきどよのにはのもかくに
みうぬ義くぐぐ。こ。しの世よ事形ち財式。
国家の大乳ある。とやをコぐコ金。とにもコぐコ今の考猫
に迫りる左つが。のうちに賢考ちるべーと涙と共雷考
考考ふ思れたこ。強とくく換せーが。まぐにやよ。影ひ脳
ぐ義の方い世に賢き女のこと。一家井もれと称ど我ふ考
して一点のやまちのとちひーが。何とやいぐりし。事雷考と

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

紀まづ一とのさはの西。屋敷の井の水。我君の江戸にて。
今日もまた三日とのこゝやう。世の中の人。ちゝ親と。
常ゝ申すひ。そもゝ世のうあんよ。今女こゝ助。
江戸の自屋のうちく。萩の方と。何やらさわ行く。
女。女こゝ涙。ぬひ。江戸にくらく。説あまた。滅ゝやふれて。
新吉の陰。その後。偽人の重ね。
あらまし。ぬきこゝ義の四郎ぞ。やうもと屋と。
て三あが。二人。沖の井。弟子付。
女。沖の井。あらぶ。二時ぞう。治られぬ。

ゝうられぬ。ようゝぶ。首とのそばて。男の方とのぞき
見れば。伝蔵ゝく。自屋の男とゝ家あり。女こゝ
大ゝ。ぬどゝ。自屋のうゝ萩の方の。平人の今べ
ゝ。ぬ。ぬ。ぬ

女こゝがふところより。引出すと二枚のえざく。牧五郎とうけ上まつる。牧五郎とそれをみひらきて。
あひすぐに行ひ対と見へられが。仁木あつてくわとめ。我君の
ゝ横ゝ入るるゝ。ひ所のそれを対よるゝ。あく却て
第ゝ三ひろん。獄屋人金五郎。乳母さを。り「味の吟味と
ゝ根と引て。ゝを拾へ。とく拾へ。拾へ。拾へ。拾へ。
とう縄を牛。義の逆城ゝ。なゝゝとゝて拾へ。
ゝて。義の逆城ゝ。なゝゝとゝて拾へ。
ゝ。なゝ。義の逆城ゝ。

と。仁木に成くゝ。義の逆城ゝ。
義縄とうきゝ。ゝ。義の逆城ゝ。
義の逆城ゝ。義の逆城ゝ。
義の逆城ゝ。義の逆城ゝ。
義の逆城

奥の一間へ入りゐべ。仁木の井筒とうとく。獄屋へそのおくりゐる。
かのえざと寄ーたりもも。仁木あぐ一味の者ありてかくだらりとも
ゐくまたり。扨も江戸屋の家の方へ来れ殿の横に寄まをえんでおいせ
ぐ。姫様あわてびくくきを来り。今は奥向屋のうに。大の騒りぬ。
しまれる井筒女こゝ成と奥へんは奥向屋の主人の短冊を。情弁。
向屋のうふいたりも奥は家老仁木殿をあ中ミその短冊の
内ふ新参と井筒のりどとめるる上は奥向屋の主人とえひ。
筆の方とふ筆せーたるびひるーと。女ふ筆のおもに
極り殿のは対ふ有りーたえひ。獄やへ引られたヤを

大夏つひくヤられゐは奥向屋の短冊よ扨ハ悪人共の様よ
押きまーと。浅せきあゐ。づゐゐい年くも細川清えの
娘と生れ奥殿様の妻とあり仁木童のそ。筆いぐと
年すべきゐは。ヤ次せんハ安られども。その女ゐ奥向屋対
ふりしゐハ。ゐ人ハ見きに仁木のそ。ゐぐえ成ハも立ハまで。
さるゐそもあぢきゐき世のヤや。身に光へ見筆にあち。汚と
名とゐ世の浅ハのと。証を父上毎上ふ伺へ来すゐゐやと。
ひえんの浅ふ家ゐる。ハ乃神の弁立員今殿のしゐ成ーて。
浅今娘立一振の程刀と持来いて。浅の間に知ゆ上れ

ぶ。其方殿の口紋結〻う。如何有あらん結させと遣
の人と言ざるのあひ。人も細き事なれども。今消ての命をなまぐら
ぬ雲も浮る世に。祝の為に成あまとも。神るふ身ぬ事なりとて
ぐと来るを。如何きと呼あひ。そちは此てうの貝とりけ
てあつひらそも。あらぬ事べ今大の上方に。いかゝして解
とあるべ出羽つ三郎は父結元へ上よきあくとのさ
まべ強きとが兵衛の方に知らせ仕ふせんとも。かくこて出
ば屋へ入とおるめやうまーやと。長つき。袖の口衣めーえく
死出の用意の白袖ぼ。喝名貝よあるべ。六あるの貝体。

若押よ落び貫ふりあむ西方こそ如来は世を落衣の呵
責ふ〻るーこぼ名と陸奥のちゆるこにのこもとを。
来果へ初ふ上品の蓮ふこちびきの〻やと。絡よ縛れて
死ーの。口の果ぞあるーこ。五年十八才。是
金く寺方の。高魂寄を。如〻来ーと。かの貝体
ふ十八と書ーう。色に臺の口と十八才。貝体
ふく縛れ。固縛よ抱をろし

高尾船字文巻二終

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

208
5
715

寛政八丙辰年元版
天保六乙未年正月再板

東都

小傳馬町
蔦屋重三郎
芳町河岸通り甚左衛町
柴屋文七
合梓

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用